

STAY OR GO

SUMIKO

Hidetaka Ito
伊藤 秀孝



スピードマシンは、こんなLIVEを見せられたら、バンドをやめるしか道は残されてないだろう。(もし自分がバンドをやっていたら・・・)ってぐらい完成度の高い、バンドの極みのようなものを感じたバンドだった。

それぞれが余分なものを排除し、必要な音だけを残したシンプルな音なのに、ハードで、ガンガン聴くもの心の中に攻め入ってくる。3人とも長く活動してきただけのことはある。それは単にキャリアが長いということではなくて、自分達の中の音楽を追求してきた純粋性があるから、3人の織りなす音が、血の通ったものになるんだと思う。

ヒデタカの声もよく聞こえて、バンド全体にスッキリした感じを受けた。それは、ヒデタカ自身にもいえることで、以前のヒデタカって世の中の悪事をすべてやらしたみたいなの毒々しさがあったんだけど、最近はスッキリして、ステージ上のヒデタカに「清らかさ」さえ感じることもある。

演奏は、こっちに息をつかせないほど、ずっと攻めてきて、その激しさに打ちめされそうになるのを必死にふんばっていると、ヒデタカの暖かくて、優しいんだけど「痛々しい」声が入り込んできて、それに包まれる。

ガンガン攻められる恐怖心とヒデタカの声に救われる安心感が同居しているようなことになって、気がおかしくなりそうになる。特にこれが顕著だったのが12月のワンマンで一度に襲ってくるから、わけわからなくなっちゃって、LIVE終了後、ボーッと放心状態だった。

これぞロック!!!って感じて、「ああ、これがロックだよ、これを求めてたんだよ、ロックを聴き始めたバンドブームの頃ってこういうのが沢山あった。シンプルで、わかりやすくて、聴く人を選ばなかったよなあ」って思った。

なのに、ヒデタカは12月のLIVEをもってスピードマシンの活動を休止するという。



「ヒデタカって個人の音楽を確立させたい」
「曲はバンバンできるんだけど、どうもバンドでやってみて、自分で納得がいけない感じになってきちゃって」
「バンドをメインにして、たまにソロ活動しようと思ったんだけど。そうじゃなくて、結局、やっぱりバンドと自分のアーティスト的な所とは、まるで違っているんじゃないんだけど、バンドに対する考え方と、自分の音楽に対する考え方ってのは「別もん」じゃないかって思って」
「(スピードマシンは)音的にはもう完成されたバンドだと思う。だからあとは俺が変わるしかないんだよ」
(12月のワンマンの解散後は、スピードマシンのバックアップバンド ilikilikichiken 3)のソロデビュー)

こんなふうには煮詰まったり、悩んだりして、立ち止まったり、やめちゃったりするミュージシャンを見ると、今のままでいいのに、今のままでガンガンLIVEやれがいいのにもどかしくなったときもある。だけど、本人はもっといいものを持って、もっと上を見ているから悩むんだよね。

そんな意識の高さをヒデタカに感じる。スピードマシン活動休止後、はじめてのLIVEは、Acoustic First Actionということで、譜面を立てて、椅子に座っての弾き語り。スピードマシンの休止させて、ソロでということだったので、気持ちも新たにして、何を見せてくれるのかなって感じて聴き始めた。だけど、休止してからあまりHもたっていないし、曲もほとんど同じだったからか、いつもと変わらない、バンド活動中のソロという感じで、聴く側にわかるほど、はっきりとした変化はなかった。

休止させた理由がわかったという手応えがなくて、その手がかりを探して前のめりに聴いていた自分にとっては、「エ?!ウソ、終わりなの?何も無いじゃん」ってぐらいあけなく終わってしまったLIVEだった。

ヒデタカのいう「自分の音楽を確立する」ということがどういうことなのか、今の時点では、よく分からない。それはこれからのヒデタカを見ていくしかないんだろうと思う。

とりあえず、2月はバンドの準備期間として、弾き語りの形でやっていき、3月からは、ソロでバンドでやっていくという。

++*SPEED MACHINE*++
+ Vo&G:伊藤 秀孝 +
+ Bass:穴井仁吉 +
+ Drum:大島治彦 +
+ 1996年2月結成。 +
+ 1997年12月をもって活動休止。 +
+++++